

医員(研修医)修了にあたって

医員(研修医)修了にあたって

歯周病診療室 小林 香往里



2005年3月で臨床研修医を修了するにあたり、この2年間を振り返ってみたいと思います。

そもそも新潟大学で研修を受けようと思った理由はそれまでと環境を変えたか

ったし研修の期間が2年間だったからです。

初めの一年間、所属は歯周科でしたが総合診療部で診療をしました。総合診療部では学生と研修医一年目が指導医の下で診療します。私の母校では学生が患者さんを診療する事は基本的になかったため、総合診療部で学生が診療している姿を見たとき「ここでやっていけるだろうか…」と不安になりました。また国家試験の合格発表までに実技試験がありワックスカービングや印象採得などをやりました。この試験を受けた後、「やっぱり、ここに来たのは間違いだったかも…」と思った事は言うまでもありません。

不安が募る中、総合診療部での診療が始まりました。総合診療部での治療は二人一組のペア診療です。衝突する事もりましたが、基本的にはどのペアも指導医の先生方の厳しい指導の下でお互いに助け合いながら診療する事が出来ました。歯科医になったばかりの私にとって治療方針などで一人で悩んだりせずに気軽に相談できる相手が居たという事は本当に良かったと思います。また同期同士、温泉に行ったり飲みに行ったり診療以外にも楽しく過ごす事が出来ました。

二年目になって所属科へ戻る事になり、今までの環境とはまた違った状況で新しく生活を始めることになりました。それまで回りは同期がほとんどの生活から上の先生方の治療を間近で見学させ

て頂いたり指導を直接受けさせていただけるようになり、また大学院生がやっているような研究も先生方のお手伝いという形ですがやる事が出来ました。やはりこれは大学にいるから出来る事だなあとと思います。研究をさせていただいた経験が大学を出た後、役に立つかどうかは分かりませんが少なくとも何もやらなかったよりは色々な事に興味を持っていく事が出来るのではないかと思います。

歯周科での診療は基本的には総合診療部で診療していた時と変わりませんが、歯周外科手術を見学させて頂くだけでなく自分で患者さんに手術する事になった時は本当にドキドキしました。学生の時に実習で豚の下顎骨を使って何度かする事がありましたが「豚の次は人間なんて！！！！」と思えば引けたのですが「人間なせば成る。」出来ないと思ってやらなければ何時まで経っても出来るようには成らないけれど、十分に準備をして先生の適切な指導の下やれば出来るのだと実感しました。

大学に残っている以上、歯科医になって日が浅くとも学生さんの教育にも携わる事からは逃られないので、基礎実習などに参加させて頂く事もあります。私は学生の頃は実習を早く終えようと必死でした。今改めて実習に参加させていただくと自分の無知を実感し、もっと勉強しておけば良かったなと思います。入った頃は研修を終えたらすぐに大学を出て開業医さんで修行だなと思っていたのですが、今はもう少し大学に残り勉強していきたいと思っています。

同期は大学から離れる人が多いようですが、離れたとしてもこれからも助け合っていけるような人達に恵まれた事は幸せな事だなと思います。臨床研修医としての2年間はこれから歯科医師として仕事をしていく基礎を築いた2年間だったと思います。この場をお借りしてお世話になった先生方にお礼申し上げます。

医員(研修医)期間修了にあたって

義歯(入れ歯)診療室 出村 純香



卒業直後、「この先2、3年は歯科医師として大変重要な時期である」と多くの先生から言われました。当時は、まだ本当の意味を理解しておりませんでした。研修期間が終わろうとしている今まさにそれを実感します。思い起こすと、私が過ごしたこの2年は、勉強すればその分新しい知識となっていく2年間、分からないことは何でも気兼ねなく自由に周りの先生に相談できる2年間であったと思います。卒後2年を1つの区切りにし、次へのステップとするためにもこの2年を振り返ってみようと思います。

まず、研修医1年目は総合診療部にて、経験豊かな先生方の指導の下、基本的な症例をじっくりと診ることができました。当時を振り返ると、知識・技術の双方で現在よりも至らない点が多かったと思います。しかし、たとえ経験が浅いからといって許される理由にはなりません。指導医の先生方には、幾度となく的確なアドバイスや厳しいお叱りのお言葉を頂戴しました。これらの言葉は非常に深く心に刻まれています。特に厳しい忠告を頂いた際は、辛いと感じる時もありました。しかし何も言われなくなったときの方がもっと虚しく無知のままであることを想像すると、非常にありがたいお言葉でした。その証拠に、頂戴したお言葉は、同様の症例に遭遇した際、今でも必ずといってよいほど思い出しますし、またそのおかげで物事に慎重に対処できるため、自分にとっていかに重要な言葉であったか痛感しています。歯科医師としての基礎固めをできた貴重な1年でした。

2年目になると、今度は義歯(入れ歯)診療室での、補綴臨床が始まりました。自分独りでの診療のスタートです。そのため、卒業直後の私は、「自分で手を動かしたい」ととかく急いでしまう傾向にありました。しかし、未熟な自分だけの殻

にこもっていても診療の質の向上は望めません。とは言いつても、ただ見学するだけでは、果たして臨床家として手が動くようになるのか心配になってしまいます。ここでは、自分自身で診療する場を設けつつ、さらには経験豊かな先生の診療を拝見することが両方可能でした。

そんな折、先輩ドクターから2年目の過ごし方に大きく影響を及ぼす貴重な言葉を頂きました。経験浅いドクターは次の3段階を踏むのが良いとのこと。まずはじめに、指導医の診療をただひたすら見学する。見て「技」を盗む。次の段階として、指導医の診療見学の際に、部分的に「言われたことのみを言われた通りに”やってみる。これらの段階が終了し初めて、次の段階としての「独り立ち」、および自分で考え手を動かす診療に行き着く、というわけです。この言葉に関する究極のところは、御本人と私自身とで多少の相違があるかもしれませんが、要は「見ること」の重要性を説いているのだと思います。これに従い、2年目は極力見学の機会を増やし、技を盗もうと決心しました。自分の診療の合間を見つけては、先輩ドクターにアシストとして付き、何か得るものはないかと観察する。それがたとえ、手技ではなく器具1つだったとしても実はそれが自分の臨床を変える鍵となっていることもありました。引つかかっていたものが1つずつ解決されていき、その瞬間、本当に嬉しく思いました。

このように振り返ると、研修医としての2年間というのは、他人の力を借りて自分のために勉強できる非常に有意義な期間であったと思います。それが、良い方向に向かうときも、逆に甘えになるときもありました。しかし、良い方向に向かうことの方が明らかに多く、費やす労力以上のことを吸収できたと確信しています。

最後になりましたが、所属講座である摂食機能再建学講座の河野教授に心よりお礼申し上げます。勉強に関することならば、何でも無条件に機会を与えてくださったおかげで思う存分学ぶことが出来ました。また、指導医の澤田先生、総義歯を基礎から丁寧に教えてくださり、本当にどうもありがとうございました。

さらに、1年目総合診療部で歯科医としてのべ

ースを作って下さった興地教授、魚島教授、福島教授、加藤教授、小林助教授、石崎先生にもこの場を借りて御礼申し上げます。特に石崎先生には、症例報告会のプレゼンテーションおよび抄録製作の際、隅から隅まで確認して頂き、細かい点にまでご意見を頂きました。何とか発表の準備を整え

ることができたこと、心より感謝いたします。

様々な先生方のご指導の下ここまで辿り着けた事に感謝しながら、この2年間をベースにし次の3年目も常に向上心を持ち勉学に励みたいと思います。

